2 調査結果から見える県全体としての傾向

1 教科に関する調査の結果から

【国語】

（1）県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化（P9）

（年度の異なる同じ学年の比較）

○ 中学校１年生は前年度より数値が１高い。

● 小学校４・５年生は前年度より数値が２～３低い。

（同じ学年集団の経年比較）

○ 中学校１年生は前年度から数値が３上がっており、学力を大きく伸ばしている。また、小学校６年生、中学校２年生は、前年度から数値が１～２上がっており、学力を着実に伸ばしている。

○ 中学校１年生は、８割を超える生徒が、前年度から学力を伸ばしている。

（2）県全体の「学力のレベル」の分布（P10～11）

（年度の異なる同じ学年の比較）

○ 中学校１年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１高い。

● 小学校４年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１低い。

（同じ学年集団の経年比較）

○ 中学校１年生は、「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１上がり、他の学年は同じである。

● 学年が上がるにつれ、上位レベルに属する児童生徒の割合は少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合が多くなる傾向がある。

（3）県全体の「学力の伸び」の状況（P14～15）

○ 中学校において、生徒が属する全ての層においてレベルが上がっている。特に、中学校１年生の「学力の伸び」が、他の学年に比べて大きい。

● 小学校５年生の上位から７５％に位置する児童が属するレベルについては、数値が下がっている。

小学校６年生、中学校１・２年生において、年々着実に学力が伸びている。特に、中学校１年生は８割を超える生徒が前年度調査から学力を伸ばしている。

一方、小学校４・５年生は前年度の異なる同じ学年に比べ数値が２～３低くなっていることや、小学校５年生の中位層の児童の「学力の伸び」が少ない。

これらのことから、学習内容の確実な定着を図るため、児童生徒一人一人の学習状況に応じた指導を充実させ、**学びのつまずきを早期に把握し、**解消することが重要である。また、上位・中位に伸び悩みが見られるため、授業では下位の児童生徒の「わからなさ」を明らかにし、協働的な学びによって多様な考え方に触れさせながら課題を解決していく過程を通して、**浅い理解から深い理解へと導いていく**ような授業づくりが大切である。

【算数・数学】

（１）県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化（P9）

（年度の異なる同じ学年の比較）

● 全ての学年において、前年度より数値が１～２低い。

（同じ学年集団の経年比較）

● 全ての学年において、前年度から数値の変化が見られない。

（２）県全体の「学力のレベル」の分布（P12～13）

（年度の異なる同じ学年の比較）

● 小学校４・６年生、中学校１年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１低く、他の学年は同じである。

（同じ学年集団の経年比較）

○ 全ての学年において「学力のレベル」の平均の位置が、前年度調査と同じである。

● 学年が上がるにつれて、上位レベルに属する児童生徒の割合は少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合は多くなる傾向がある。

（３）県全体の「学力の伸び」の状況（P16～17）

○ 小学校５年生の上位から２５％に位置する児童、中学校１年生の上位から７５％に位置する生徒が属するレベルについて、伸びが見られる。

● 上記以外の学年・レベルにおいては、中位層（上位から２５％～７５％に位置する児童生徒が属する）の数値の変化が見られない。特に、小学校５年生の「中央に位置する児童が属するレベル」と中学校１年生の「上位から２５％に位置する生徒が属するレベル」については、数値が下がっている。

全ての学年において、前年度調査から学力レベルに変化がなく、前年度の同じ学年と比べて全ての学年において、数値が１～２低くなっている。また、学年が上がるにつれて、下位の児童生徒の割合が多くなっている傾向がある。

これらのことから、**下位の児童生徒がどの段階でつまずいているのか経年のデータで分析し**、要因を考察して具体的な指導改善に生かしていくことが大切である。

一方で、成果が見られた部分はどこか、**たとえ小さくてもよさの変化があった部分に注目し、普段の児童生徒の様子と比較しながらよさの要因を組織で確認したい**。よさを組織の「強み」と捉え、強みをさらに伸ばしたり、他の教員の指導に広げたりしていく取組が特に大切である。

２　児童生徒質問調査と学力の関係から

【「学力のレベル」の高い児童生徒が、肯定的な回答をした割合が多い質問項目】

（１）授業に関すること（P28～33）

- 授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだことがあるか
- 課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかり持てるようになったことがあるか
- 授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったことがあるか

（２）学習意欲や学習環境に関すること（P36～55）

- 授業の内容は理解できているか
- 授業の前に、机の上に学習用具をそろえることができているか
- 学校の先生たちは、自分のよいところを認めてくれているか
- 学校の友達は、自分のよいところを認めてくれているか
- 先生の話や友達の発表を聞き、自分の考えを発表することができているか

（３）家庭での生活に関すること（P58～69）

- 学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間勉強しているか
- １か月に、何冊くらいの本を読むか
- テレビゲームをしたり、携帯電話を使ったりすることについて、家の人と約束を決めているか

「学力のレベル」の高さと関係が見られた質問項目から、県全体の傾向を参考にしながら、自校の児童生徒一人一人の実態を見直し、日々の指導に生かしていくことが大切である。

その際、「ふくしまの『授業スタンダード』」や「『学びの変革』授業デザイン」を活用した授業改善や、一人一人の児童生徒が自己肯定感を高められるような互いのよさを認め高め合う学級経営、家庭学習の方法の指導や情報モラル教育の充実等により、良好な環境を構築し、児童生徒の資質・能力の育成を図っていくことが大切である。

3　学校質問調査結果から見える学校の取組状況

（１）学校・教職員の学力向上に向けた取組状況（P70～77）

○　小学校においては校長が「ほぼ毎日」授業を見て回る割合（83.0%から 85.1%）が継続して伸びているほか、小・中学校共に校長による話合いへの働きかけや研修の奨励のもと、学級・学年運営の課題などを全教職員で共有し、組織的に対応する取り組みが定着・進展している。

●　児童生徒の学力の現状把握と分析を行い、課題把握を「よく行った」と回答した割合が両校種ともに３年連続で下降傾向にある。

（２）令和８年度の小学校６年生、中学校３年生に対する取組状況（P78～87）

【家庭学習の状況について】

○　ほとんどの学校で、家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。

○　家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。

【国語の状況について】

○　発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導をしている。

○　中学校３年生について、理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導の割合が増加している。

【算数・数学の状況について】

○　国語に比べ、補充的・発展的な学習を行う時間を確保する学校の割合、習熟の早い児童生徒に対する発展的な内容を扱った指導の割合がやや大きい。

○　どちらの学年においても、理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導の割合が年々増加している。

（３）調査結果の活用状況（P88～91）

○　ほぼ全ての学校が、個人結果票を返却する機会を捉え、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。

○　調査結果から把握した内容について全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が前年度より増加している。

今年度は調査方法がＰＢＴ（紙によるテスト）から、ＣＢＴ（タブレットなどコンピュータによるテスト）に切り替わった初年度であり、従来のＰＢＴ調査とは問題の表示方法や解答方法の形式が異なったため、児童生徒のＣＢＴへの不慣れさが結果に現れている可能性が考えられる。

これらの結果（P3～P6）は、県全体としての傾向であり、そのまま各自治体や各学校・各学級においても同じであるとは限らない。各学校においては、県全体としての傾向を参考にしつつ、各自治体や各学校に送付されている結果帳票を活用し、詳細に分析することが重要である。そして、教師はその分析結果から児童生徒一人一人の実態を捉え、授業の質の向上や望ましい学級集団づくり等にいかすことで、児童生徒が学力を着実に伸ばせるよう指導をすることが大切である。